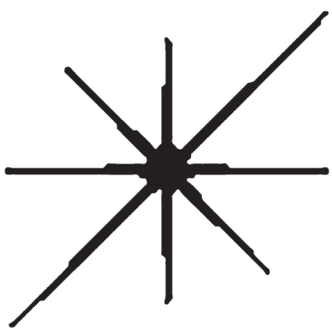
コメット通信 7

［’21 年 2 月号特別付録］



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

物語の余熱（2）
——「ブラック・ノート」抄

中村邦生

13　書物の喜劇

1 カ月ほどになろうか，しばらく「ブラック・ノート」から離れていた。面倒な入手の経緯があるにせよ，こうしたノートが何冊も存在しているという現実感そのものが希薄になってしまい，ぼんやりした，長いような短いような微睡みの後の気分に似ている。1 冊目を手にしてみたが，たぶん気のせいかと思うのだが，前よりもややずっしりした重さの手ごたえがあった。湿気をたらふく吸い込んだわけでもないし，こちらの手の力が急に衰えたとも考えにくい。試しに 2 冊目を持ってみると，さらに重みが加わったような感触がある。

とりたてて拘ることもないだろう，と遣り過ごしているうちに，不意に思いついたことがある。ちょうど『同時代』（黒の会）第 4 期 3 号の原稿締め切りが迫っている。そこで，笠間保の書いた掌編を借用し，私の作品として提出するというものだ。ノートから抜き出して転用すれば，いささかなりとも重さが軽減するのではないか。ならば，2 冊目のノートから試すのが良策かもしれない。どの作品でも，丸ごとどこかに移動させれば，「ブラック・ノート」の重みの手ごたえに変化が生ずるに違いないと考えた。

普段から取り留めのない思いに耽溺する癖がないこともないのだが，今回はわずかであれノートを手にした重さの違いに執着を覚えた。自分自身の身体的な反応に結末をつけたいと思ったのだ。何にするか，しばし思案の末に，「はやり正月」（2 冊目，103 － 130 ページ）に決めた。

その場合，少なくとも新たな装いは必要だろう。そこでヒントになったのが，笠間への貸出ノートに記載の見えた『書物の喜劇』（筑摩書房）だった。これを「はやり正月」のフレームとして使う試みだ。

新米の秘密工作員あるいは不慣れな外科医はかくもあろうか，といった手つきで，「ブラック・ノート」から「はやり正月」を外しにかかった。手間取りつつも新たなフレームに収めた結果，予期しない消滅のテーマが浮かび上がり，まさしく物語の余熱が漂った。どのような形で新たに原稿化したのか，以下に示す。『同時代』への小説原稿のタイトルは「はやり正月」なのだが，ここでは「書物の喜劇」としたい。

なお，「物語の余熱」（1）で登場した「はやり正月」をふたたびここに見出し，意外に思われる向きもあるかもしれない（同一の文ではないにせよ）。この掌編を外したり戻したりする振る舞いは，話を追っていただければ，必然的な成り行きと了解していただけるはずだ。同時にこの試みは，私自身がまだ自覚できていない隠れたモチーフや伏線があるような気がしている。

＊

「書物の喜劇」

テレビで今日の天気予報を見ると，大雨を運ぶ前線が九州から東北まで伸びている。パンデミック禍の中を 2 カ月ぶりに都心へ出かける予定を立てたものの，しばらく迷った末にあきらめた。代わりに，前夜遅く書棚の奥からひっそりと現れたハンガリーの文化史家のラート＝ヴェーグ・イシュト

ヴァーン著『書物の喜劇』（早稲田みか訳）を読むことにした。
「最高の知性によるとびきり愉快で無益な本」と書かれた帯を外し，真中あたりのページを開いてみたところ，「本にふりかかる運命の数々」の見出しの文面を被うように，小説らしきものが書かれた薄紙が挟んであった。A4 サイズで 3 枚，旧式のワープロで打ち込んだらしく，表裏いずれも印字が薄れている。目を凝らして，かろうじて判読できるような箇所も少なくない。
　タイトルはあるが，書き手の署名を欠いたままだ。ことによると忘却の淵に沈んでしまっている，私自身の書いた掌編かもしれないと疑ったが，思い出す当てもなく，記憶は薄闇のなかを堂々巡りするばかりだった。
　どこかの古書店で購入した本だとすれば，前の所有者の作である可能性が大きいが，そのあたりの入手の記憶も判然としない。本の感触からすると，新刊本として買ったようにも思える。
　1 つ妙なことがあるとすれば，読み進めながら，紙を透かして，印字のかすれた文字列を凝視し，文脈を推測すると，脳内のスクリーンにひとまとまりの文章が浮き出てくることだった。その瞬間，書き手の自他の区別など消え去ってしまうような愉悦を覚えたのである。
　タイトルは「はやり正月」というもので，広島のローカル列車の車内風景のスケッチから始まり，ある夏の出来事が語り手の「私」の視点から語られている。
　作品を以下に記すが，先の印字の消えかかった文を復元した箇所は，**ゴシック体**で示す。試してみると，その部分が話の屈折点として，何やら意味ありげに振る舞い始めるように思えた。

〈はやり正月〉
　ある 8 月の真昼, 私は芸備線に乗り, 広島駅から三次へ向かっていた。三次にある乳業メーカーに，宣伝パンフレット制作のための打ち合わせがあったからだ。全国の自然食品の店を中心に乳製品を提供している会社とのことだった。
　仕事を仲介してくれた広告エイジェントの担当者は，1 つ後の列車で現地に向かうことになっていた。新幹線の遅れで同じ列車に乗り損ねたという。
　芸備線は豪雨による土砂災害がたびたび起こり，路盤流失で復旧に 1 年を要した年もあった。
　車内はサッカーやバレーボールの試合を終えたらしい高校生たちが席を占拠し，ほぼ全員が眠っていた。足を通路に投げ出して, 肘掛けを枕にしている者もいた。私の席は運転席に近いボックス・シートで，隣の窓側の席に男，向かいに 2 人の女性が座っていた。3 人とも同じ 20 代半ばの青年たちで，会社の同僚らしく，共通のアタッシュ・ケースを用心深く膝の上に乗せていた。広島駅を出るときから賑やかな話が続き，上司の噂やグルメ情報など，話があちらこちらに飛んではまた戻る。
「ミユキ係長，40 になったんじゃと，知っとった？」
　と窓側の女性が言う。
「へえ，そんなおばちゃんなんね。ぜんぜん，わからんかったわ」
　男は BOSS コーヒーの空き缶を座席の下に置きながら，そう応じた。
「えらい若う見えるよねえ」
　と私の前の女性は細い声で呟いた。
「どうしてばれたか, 知っとる？　誕生日に, ヤマキ課長がね, みんなの前で, 40 歳, おめでとうって，うっかり言うてしもうたんじゃと」
　話の引き回し役は，この窓際の女性らしい。

「そりゃあ，ひどいのう。ぼくでもそんな失敗はせんよ」と男の奇声が私の耳元に響く。
　課長の誕生日祝いの言葉が，どうしてまずいのか私には理解できない。
　声の細い女性が新情報を伝え，文脈を変えにかかる。
「うちね，前に八丁堀のイタリアンで，ミユキ係長に会うたことあるんよ。知らん人と食事をしよっちゃった。それがね，会社におるときみとうな，きびしい顔じゃのうて，えらいやさしい感じで別の人みたいじゃった」
「それ，あのしらすパスタの店じゃないん？　ちがうかね。その隣の最近評判の店，知らん？八丁堀に古民家を改装したフレンチがオープンしたんよ」
「そりゃ，そうじゃろう。あの人は。自分を使い分けよる」
　と男は話を戻してしまう。
「うちにゃあ，ぜったいできんわ」
「うちもむり」
　そう言って，物静かな方の女性がトイレに立った。
　しばらく戻ってこない間に，列車は次の駅に着き，中学の低学年くらいの少女が私たちの前に立った。**すると席を外している女性のアタッシュ・ケースを，男が隣の女性の膝に移し，「どうぞ」と少女に言った。促されて少女が座ると，2 人は顔を見合わせて笑った。**他人事ながら私は軽い動揺を覚えた。少女は一礼して座ると，『マーガレット』を取り出し，たちまち意識の集中した顔になった。
　もどった女性は，席がなくなっているのを見て，声には出さずに「あっ」と驚きの表情を見せた。2 人の男女はまた笑いだし，**困惑した女性はその様子に合わせて笑顔を作ってから，運転席を覗ける窓の前に移動して，前から迫ってくる田園の風景を眺めていた。**
　電化していない路線は空が広く見えた。運転室の上には，三重県の観光ポスターがある。

〈夏休みには三重に行こう。きもちいいのが三重マルなのだ〉

　芸備線に三重の宣伝ポスターを貼って，どれほど効果があるだろうか。私はにわかに落ち着かない気持ちになった。
　席の男女は何事もなかったように，1 カ月で辞めた新人の話を始めた。この 3 人の同僚たちの関係は，いったいどこに問題があるのだろう。私は目の前に宿題を置かれた気分で，頭をめぐらす。
　男がおしゃべりな女性に余計な気を遣っているのは，すぐにわかる。当のおしゃべりな女性は，実はとても気が弱いのかもしれない。弱いから，しゃべり続ける。よくあるケースだ。一番問題なのは，おとなし気な女性かもしれない。本当は意外に神経がタフなのだ。しかし，だから何だというのか。私はしだいに考えるのが面倒になった。
　列車は多見中という駅に着き，広島行きの列車を待って待避線に入った。**5 分間の停車のアナウンスがあってドアが開き，蝉の声が熱い空気と一緒に入りこんでくる。**無人駅だが，乗降口の脇に赤いコカ・コーラのロゴの入った自動販売機が見えた。私は気分を変えるために，荷物を持って外に出た。ついでに，相変わらず運転席を覗き込むように立っていた女性に，「席，空きましたよ」と声をかけた。**女性は会釈だけを返して，席には戻らなかった。**
　自動販売機には，なぜかコカ・コーラのライバル社の奥大山の天然水があった。飲むにつれて冷水が胸の中に沁みこむ。プレハブの白い駅舎のほかに建物はなく，**橋を渡った先に集落が見えた。**

電柱が1本もない駅前風景に清々しさを覚え，私は深呼吸をした。息を戻した時，集落の先の方から祭りのような笛と太鼓の音が聞こえて来た。音に引き寄せられて進むと止まり，また歩を進めると聞こえなくなった。それを繰り返すうちに橋を渡り，集落の入り口らしい場所に着いた。朽ちかけた円柱が2本立っていて，そこに門松が飾られている。道を進むと人気のない家がまばらに何軒か続き，どこの玄関にも大きな松飾りがあった。**蝉しぐれの降りそそぐ中で目にする松飾りに好奇心がうごき，私はこのちぐはぐな光景をしばらく楽しみたくなった。**それにつれて三次の牧場での仕事の約束は，もはや記憶の奥に遠ざかった出来事のようで，実感を失った。

村落への誘いの幻聴のように聞こえた笛と太鼓は，すでに消えている。左手の欅並木の正面に社が見え，耳を澄ますと人の気配を感じた。その方向に進んでいくと，玉砂利を踏む足音が視線を集めた。20人ほどもいただろうか，男女の顔がいっせいにこちらを向いている。威圧感があったのは一瞬で，人々の間に途惑いの表情が浮かんだ。

仮設のテントが建てられ，宴席の用意があった。酒瓶が並べられ，黒塗りの重箱もある。

「どちらから来られましたかね？」

集団の中で，一番若そうな30代半ばくらいの男が訊いた。すると反対側に座っていた恰幅のよい老人が手を伸ばし，男の頭を叩いた。すると周りの人びとがそろって，口に手を当てて，何もしゃべるなという仕草をした。老人はテントの脇にあった丸椅子を指さし，私に座るようにと合図した。**言われるまま身を固くして，事態の成り行きを見ていたが，全員が押し黙ったまま何事も始まる様子はない。**そのうち，皿も箸の用意もないので，重箱も空なのではないかと思い始めた。

木立に囲まれたテントの向こうは，稲穂が炎天下で風に揺れている。木々の密集した枝葉を通ってくる熱風は，涼感を含んで肌になじんだ。

束の間，眠気を覚えたとき，たぶん頭を叩かれた男の妻と思われる，若い女性が私のもとに来て，供え物に敷く半紙のようなものを手渡した。伝言があって，こう書いてあった。**「お正月をして居ます。若水迎えをして居るところですから，水を迎えに行っている年男だけでなく，邪気を払うために，みんな口をつつしみ，黙って居ります。ご協力を，乞い願います。一同」。**

そういうことならば，私はもう退散した方がいいかもしれないと思った。急げば，次の列車に間に合うはずだ。半紙の裏に，その旨を記して近くに座っていた立派な顎髭を伸ばした老人に回送を託した。老人が目を通してから，全員に渡った。**誰が書いたものか，ふたたび新たな紙が回って来て，「この日に，たまたま外からいらした来訪の方は，吉兆をもたらすと言われています。明日の朝までご滞在を切に乞い願います」とあった。**続けて2枚目が来て，「粗末なものですが，ご夕食，お部屋は用意いたします。後ほど，堂上という者が案内いたします」と前とは違った筆跡で書いてあった。

堂上は集団の奥にいた私と同世代くらいの小柄な男だった。丸顔に大きな目が特徴で，ここから中国山系を越えた島根出身の元首相の容貌を思い起こさせた。縁由を守って，この人も沈黙を通した。

案内されたのは無人となった古民家で，20畳ほどもある居間の真ん中に寝ることになった。堂上との別れ際に，いったいこの村に何が起こって，正月をやり直しているのかと，疑問を走り書きして渡した。文面に目を通した顔に思案気な表情が浮かび，軽くうなずいた。

夜になると堂上が現われ，昆布の握り飯が2個とお煮しめ，茄子の漬物にお茶のペットボトルを運んできた。相変わらず口を開かず，盆の上の書付けを手で示してから，立ち去った。**文面に**

は，村は去年に続いて豪雨で大事な山が崩れ死者が出たこと，その山は長年にわたって松茸の豊かな収穫があったこと，若い連中がつぎつぎと村を出ては行方がわからなくなっていることが書いてあった。

窓から涼しい風が流れて来たにもかかわらず，その夜，私は寝付けなかった。居間の大きな柱時計の動く音と，天井をネズミが走り回る音が眠りを妨げた。

暗闇の中で天井を見上げ，ネズミたちの走る動線を頭の中で描いているうちに，黒々とした線で埋まり，ますます目が覚めてしまった。ようやく眠りこんだのは朝になってからだった。

目覚めたのは昼近くで，柱時計の針は 11 時 50 分を指している。部屋の隅には前夜と同じ盆に，餅と鶏のささ身に三つ葉の雑煮，小さな重箱に野菜が中心のおせち料理，そして形だけのお屠蘇が並べてあった。

私は空腹を覚え，一気に食べた。餅はすでに汁に溶けかけていたが，その歯ごたえも楽しむ気分だった。脇にお年玉袋のようなものがあり，開けてみると，紙片に**「謹賀新年。ありがとうございました。どうぞ，お気を付けてお帰り下さい」**と記してあった。

村には人の気配がない。私は急いで駅に向かった。小走りになっている自覚はあるのに，足は動かず，暑さで汗が吹き出してくるばかりだった。

蝉の隙間のない鳴き声が暑さをますます煽った。

公衆トイレに似た造りの白い駅舎が遠くに見え，折よく列車も止まっている。私は鞄を横抱きにして疾走し，ドアの閉まる直前に車内にたどり着いた。

息を整えてから，あたりを見回すと前日と同じ光景がある。席のなくなった女性が運転席の窓から行く手を見つめ，ボックス・シートの向かい合った席では男女が，「知っとるかしらんけど，ミユキ係長，会社におるあいだだけで，3 回も歯磨きするんよ」と相変わらず賑やかな話し声をたてていた。

隣の席の中学生は『マーガレット』を読みふけっている。高校生たちも大きなスポーツバッグを枕にして眠りこけていた。**「席が空きましたから，どうぞ」と私は立っている女性に声をかけたが，今度も会釈だけが返ってきた。**

しばらくして私は元の席に戻り，窓外を流れていく夏の雲と山あいの家々を見つめながら，溶けかけた餅の入った雑煮の味をしきりに懐かしんでいた。

掌編はここで終わる。タイトルにある「はやり正月」とは，災害など凶事のあった年に厄払いの意味で正月を迎え直そうとする，臨時に設けられる村落共同体の休日のことだ。

青木玉が祖父の幸田露伴から聞いた話として，明治のある時期に「勝手正月」（『上り坂下り坂』）があったことを書いている。真夏に紋付袴で人を訪問したり，年賀状を出したりしたという。これは遊び心から各自が勝手にやる正月で，「はやり正月」とは異なるだろう。

私もかつて一度だけ芸備線の三次方面から広島行きの列車に乗ったことがある。沿線に沿って山と川が交互に現れては遠ざかっていった印象が浮かぶ。舞台になっている場所はどのあたりか，記憶をたどっても手応えのないまま車窓の風景が明滅した。

小さな旅を経験したような気分で，また読みかけの本を開き，「はやり正月」の紙を元のページに戻した。「どこに行こうと，不運が本を待ちかまえている」と『書物の喜劇』は述べている。「日光は退色を引き起こし，粗悪紙に印刷されていれば，紙は黄色く焼けてしみだらけになる。絶えてページの開かれることのない本でも，背や角は解けたり破けたりする。誰も読まない本であっても，大掃除

で処分されてしまうことだってあるのだ」。

私の『書物の喜劇』だって，明日から同じ「不運」が始まるかもしれない。今回を最後に，もはや二度と開かれることのない本となり，やがて商品価値を失って廃棄され，溶解処分にされる。139 ページに挟みこんだ「はやり正月」も，この本と同じ運命をたどることになるだろう。私としては，それもまた喜劇的な結末なのだと考えたい。

*

このように，「はやり正月」を抜き書き，借用した結果，はたして重さに差異は生じたのか。それを確かめようと，ノートに手を伸ばした瞬間，その拘りが空騒ぎめいたものに感じられ，そうなると自己抑制の意識がのさばりはじめ，何もかもが滑稽なことに転じて，たちまち生の力が減衰さえするように思えてしまった。

すると意外なところから，回復への呼び水が沁み出した。なんのことはない，元の「はやり正月」にはなかったのだが，今回の「書物の喜劇」の文末に追加した一文，「私としては，それもまた喜劇的な結末なのだと考えたい」である。自分が口走ったこと，書いたことが呪文として暗示的に作用し，新たな事態を引き寄せることはよくある。先に述べた「消滅のテーマ」を出し抜くような展開に出会ったのである。それもまた喜劇的結末と言っていいかもしれない。

「はやり正月」を借用するにあたって，先に引用したように，新たなヴァージョンではたまたま手に取った『書物の喜劇』に差し挟まれていた薄紙の発見があり，そこに掌編の印字があったと設定したのであった。ところが，まさしくその企みをパロディ化するような新たな出来事に遭遇したのである。「はやり正月」が書かれた「ブラック・ノート」2 冊目 103 − 130 ページの 4 ページ先に，手のひらサイズの大判の付箋 Post-it が 2 枚重ねで貼ってあり，「はやり正月」の読解が試みられているのだ。同じように紙片が挟んであったのだから，確かにパロディ的な出来事とは言い得るだろうが，借用した今となっては，むしろ喜劇的な罠（トラップ）に掛かったように思える。

誰が読解したのか明示されていないが，紙の右隅に「歴史学者 H. J. さんから読解メモ」とある。笠間保がどのような事情でこの歴史学者のコメントを入手したのか不明だが，その読解の面白さに，しばし時を忘れた。

〈H. J. 氏のコメント〉

「はやり正月」についての寸評です。読者に知的なゲームを挑むような，虚実が巧みに組み合わされた内容で，没入しつつも，安易な感想を述べることが憚られる緊張感もあり，いずれにしても楽しい時間を過ごさせていただきました。

最初は，車内の若い男女 3 人の描写に唸り，些細な事柄が醸し出す複雑さに，語られない人間関係をいろいろ想像したり，語り手を誘う笛と太鼓に最近のネットロア（インターネットで流布しているフォークロア）を連想し，なぜ境界の入口は笛と太鼓なのかをいろいろ考えてみたりしましたが（太鼓については以前，「里山考」でも言及しました），何度か拝読するうちに，やはり文章の技巧面に惹きつけられました。

掌編「はやり正月」の文面のうち，作者が補ったかすれた印字箇所には，何か意味があるのだろうか。本当に「かすれていた」ものならば，文や語句の途中であってもいいはずですが，ゴチック体の箇所は，それぞれに文として完結しています。試みにそこだけ抜き出してみると，意外にも，

物語の始まりと終わりに，運転席から外を眺めるか細い声の女性の存在が，大きく位置づけられていることが分かりました。この物語自体が，日常の疎外と歪みのなかで彼女が垣間見た，束の間の幻想であったのかもしれない。作中，語り手が現実＝車内で関わりを持つのは，この女性だけです。

小説としての構造上，われわれは語り手の目線で世界を見せられていますが，その語り手は彼女だけにしか見えていない，彼女が創り出したもうひとりの自分，日常をリセットする「はやり正月」そのものなのかもしれない……と，そこまで考えまして，ようやく，そうか，語り手自身が御歳神であったのか，と想到した次第です。

この種の物語では，村落の出来事自体がひとつの幻想のように，あるいは異域の出来事のように扱われるのが通例ですが，この掌編では，語り手自身が，村のはやり正月で迎えられた来訪神だったのではないか。それゆえに彼は,「祭り囃子に誘われ」神社に辿り着き，一連の神事をみて，一夜の饗応を受ける。神饌を食して再び送られ，帰途に就く。

村人は，彼が神であるゆえに，直接言葉を交わさない。そもそも，彼が乳業メーカーに行こうとしていたのは，丑年の御歳神として祝福を与えるためかもしれない。あるいは，電車に貼られている観光ポスターの示すように，彼は伊勢からやってきた御食津神なのか。そして作者も電車の乗客としてすれ違い，どこかへ消え去ってしまうはずの御歳神を迎えることができたということか。それは書物の神，小説の神，創作の神でもあったのでしょうか。

アタッシュ・ケースの中身は何なのか，橋だけあって描写されない川の意味するものは何かなどなど，まだまだ疑問はありますが，ちょっと話が野暮になってきましたので，これくらいで止めておきます。しかしやはり，小説の可能性をあらためて痛感させていただいた印象です。自分もまた創作を書いてみたくなりました。

「はやり正月」を借用したのは，うかつだったかもしれない。歴学者の術中にはまった感じがするからだ。しかし，とりたてて後悔の念が湧かない。それどころか，この分析的読解がじわりと説得力を持ち，愉楽さえ覚えさせるのは，こうした試み自体が作品のように思えるからだろうか。神話的な含意は言うまでもなく, この物語が細い声の女性の「垣間見た, 束の間の幻想」ではないか, なぜなら「語り手が現実＝車内で関わりを持つのは，この女性だけ」であるという指摘なども，おそらく書き手自身すら気づいていないことだろう。借用した私も同じだ。

語り手の存在の超越的な役割の解読など，さすがに歴史家は大きな文脈を持っていると感得することしきりだ。人物の持つ含意の読み取りに説得力があって，なおも深読みを誘惑される。しかし同時に，これを読んで作者の笠間保は「なるほど，そうだったか」と膝を打つ思いがしたであろう。なぜなら書き手は自分の書いたものに，しばしば無知だからである。読み手の方が作品に通じていることがよくあるのだ。

ここで示されている読解の面白さは，作者があらかじめ意図して，多義的な意味を仕組んだ結果ではないだろう。大きなプロットのようなものがあるにせよ, 書きながらそのつど, 話の方向が決められ, たびたび思い直して検討し直し，なおかつ細部に宿るイメージを追って言葉を引き寄せ，行きつつ戻りつつほとんど閃きと勘だけで書き進める。進行して初めて物語が動き，イメージも湧き出す。作品の詳細な情報をあらかじめ書き手は持ってはいない。

したがって，書くとはあらかじめ失われた空白をこつこつと埋めては掘りおこし，また埋め戻すような徒労を愉楽とする行為なのであり，まことに特権的な愚鈍さに貫かれた作業であろう。

ただし，書く営みをこうした創作意識で一元化するのは狭隘であることは承知している。フォークナーとか石川淳は，ペンとともに書きながら考える作家だったが，その対極に屹立するのは，ジェイムズ・ジョイスの『フィネガンズ・ウェイク』となるに違いない。

ヨーロッパ各国語（一部，日本語もある）を合成したジョイス語で書かれた超絶的な言語創作物は，すべての表現に多義性が仕掛けられ，読者に向けて解読を挑発する。この小説の意味作用の全容は，作者によって隅々まで周到に統御されている。この点から言えば，まことに怜悧で聡明な文業なのだ。ちなみに，この小説の最初の邦訳書（『フィネガンズ徹夜祭』と題し，全体の 5 分の 1 ほどの訳）の企画と編集に携わったのは，出版社勤務の時代の私であったが，果たしてどの程度この難物を理解していたか，今でさえ実に覚束ない。というか，「理解」という読書体験そのものに根本的な問いを突き付ける小説なのだ。

この時の訳者の 1 人であった柳瀬尚紀はおよそ 20 年後にこの奇書を全訳する偉業を成しとげた。遊戯性にあふれた重層する意味を精緻に解読し，表意文字としての漢字の特性を駆使したアクロバット的な翻訳で，例えば密かに織り込まれたアイルランドの川の名を，中小に及ぶ日本の河川に置換したりしている。原書の解読には言語能力に加え，詰め将棋を解くような理を分けることに長けた頭脳が必要だ。柳瀬は文意の論理的読みの強者で，将棋にも卓越した能力を持ち，プロ棋士とも渡り合うほどだった。作者が仕掛けた意味の多重性を解析し，意味統御の貫徹したテキストの味読へ進むのは，運用する言葉の情報量の多さに加えて数理的な思考を持つ者だろう。

ナボコフの小説にも同じことが言えるかもしれない。『ロリータ』一作をとってみても，古今の文献からの引用，パロディ，転義など精巧な修辞的な仕掛けを凝らした作品であるからだ。「ロリコン」なる言葉の出所の小説として，中年男の 12 歳の少女に対する〈萌え〉が，危うい性愛場面を繰り広げるなどという期待を裏切る知的工匠に富むことからすれば，犀利な読解の方法を持つ読者を選ぶことになるかもしれない。

ところが，読み進めながら脇道にばかり見惚れる私のような遅鈍な読者もまた祝福されるのが小説なのだ。何よりも充実した細部描写を作者の目論見を掠めて楽しんでしまう。まさしくこうした読解行為の逸脱する現実こそ重要なのだと思う。作者が何ら意図的な意味の方向性を想定していないにもかかわらず，気まぐれな読みの動線を作りながら，ある細部に心惹かれて立ち止まり，情緒的な愉楽に身を置くような読書の実態だ。

『フィネガンズ・ウェイク』のような作者によって多義的な遊戯性が周密に仕組まれた小説でさえ，気分の迷走と化した読書はあり得る。『ロリータ』となれば，すぐさま些末であるが故に忘れがたい例が思い浮かぶ。ハンバート = ハンバートとロリータが泊まった安モーテルの壁を伝わってくる隣室のトイレの水音がナイアガラ瀑布となって落下するとか，アメリカの田園風景への懐かしさが，ペテルブルグ郊外での幼年時代，育児室に下がっていたアメリカ製の壁掛けに描かれた平原の風景に起因するとか。

作者が多くの文学作品から充填した引喩や修辞的多義性に，読者が必ずしも応接せず，鈍感で呑気に見逃したにせよ，蔑まれることはない豊潤なテキスト的体貌を持つ作品こそ傑作の条件となろうか。さらに言えば，テキストの道端の些細な場面やイメージに気を取られる遅鈍な読み手こそ，およそ実験的手法への自意識を欠いた身辺雑記風の凡庸な私小説でさえ，めざましく豊かに，図らずも多義的に読んでしまうのだ。しかもそうした些末なイメージの表出部分が，仮に批評的な言辞で説明されなくても，作品の意外な磁界につながっていることさえある。

H. J. 氏の評言に促されて長々と書き綴ってきたが，いま改めて「はやり正月」を読み返したところ，

不意に気に留まった細部がある。語り手の「私」が広島行きの列車を待つ退避駅で水を求める場面だ。

> 自動販売機には，なぜかコカ・コーラのライバル社の奥大山の天然水があった。飲むにつれて冷水が胸の中に沁みこむ。

読者もにわかに喉の渇きを覚えて，水を飲みほしたような気分になる。冷たい感覚が胸に広がるだろう。しかし，ここに何かマジックが潜んでいるようだ。気になるのは「奥大山の天然水」である。大山は中国地方の最高峰の霊山として古くから多くの信仰を集めて来た。ここの水を飲むことを結節点として，「私」は異界に参入し，空間と時間が反転のうちにタイムトラヴェラーとなるのだ。

14 「感応的な出会い――ある夢想」

（2 冊目，134 ページの大型付箋 Post-it 2 枚の裏面）

戯れ事と言いながらも，気になっていたブラック・ノート 2 冊目の重さの手ごたえは，結局どうなったか。どうやら微妙な重みは，H. J. 氏のコメントの紙片が加わっていたせいではないかと思い到った。ただし，物理的な重量ではなく，書かれた内容の質的な重みのためだ。そう感じたのは，付箋の裏面にも細い字で文章が記してあったからだ。

> 「感応的な遭遇――ある夢想」
>
> 読書が感応的な行為となる刺戟的な出会いの経験など，夢想に過ぎないかもしれない。テキスト＝ボディを相手に，その姿態の肌触りと反応を確かめながら，全身に遍在するツボというか，利き所をくまなく愛撫していく。するとテキスト自ら歓喜の声を上げる脈所に到る。その極点の発見に呼び覚まされた気分の昂揚をはずみとして，さらに感じやすい急所（クリティカル・ポイント）との出会いを果たすのだ。このときもはや相手の快楽と読み手の快楽の区別は曖昧に溶け，姿態自体の存在も忘却されるだろう。ただ行為のみが現出する。

〈寸感〉

読書行為について記された文であるが，読書術とはすなわち交合術の謂というわけなのであろうか。はっきり根拠があるわけではないが，このややテンションの高い批評文はどうも笠間保の記したものではないような気がする。ならば，出典は何か，貸出ノートも確かめてみたが見当たらない。めぼしい読書論に当たってみたものの，突き止めることはできなかった。こうした疑わしさが容易に解消できなかったのは，付箋ではなく 2 ページ先のノートに，少しぎこちなくはあるが，この文の続きとも読める，次に示す似た調子の批評文を見つけたからだ。

15 無題

（2 冊目，136 ページ）

H. J. 氏のコメントをめぐる私の主張に，あたかも先回りし待ち伏せしているかのような文意で，出典への疑わしさに屈折した思いが加わった。というか，何やら苦笑を抑えがたい居心地の悪さを感じてしまった。

ロラン・バルトは，身体の中で最もエロティックなのは，衣服が口を開けているところだと言っている。たとえば，2つの衣服の重なるところ，半ば開いた肌着や手袋と袖のように2つの縁の間にちらちら見える肌の「出現 － 消滅」の儀式だ，と（『テクストの快楽』）。ことによると文学テクストの「口を開けている」多感な窪み，感応の空隙もあるではないか。

そうした空隙，透き間，開口部，すなわち感応の細部というものは，あらかじめ定置されているのではない。したがって，文学テクスト＝感応的姿態として示された比喩の限界は，テクストのツボがやがて発見されることを前提に，一定の場所に隠されているかのごとく，静態的に描き出されてしまうことだ。これだとテクストのさまざまな仕掛けの工夫にもかかわらず発見にいたらぬ読み手がいる場合，書き手から勘所のおさえが悪い遅鈍な読者として，嘲弄や侮蔑または鈍感さへの憐憫の対象にされたり，ときに作者または作者の意図に敏い怜悧な物知りの読者から，もったいぶった口調で解説を受けたりするありふれた構図を作り出す。感応のツボを探り当て，意外なところで意想外の気分を喚起する細部の驚きは，読み手の一人ひとりの読み行為とともに立ち現れ，「出現 － 消滅の演出」は読み行為の運動性によって可能となるのだ。

〈寸感〉

異論があろうはずはない。私が言いそうなことを，あらかじめ網を張って誘導したような主張を記している。ここでも，笠間保の書いた文ではないと臆断してしまうのだが，これは冷静に考えれば，先回りされたことに対する私自身の寝ぼけた（実際，少し前まで微睡んでいた）対抗心からくるものかもしれない。だが一言付け加えるならば，作中に手の込んだ仕掛けをする怜悧な作者に向けて，またそれを読み解く聡明な読者に向けて，いささかなりとも反感をいだくとすれば，それもまた転倒した同一の事態となるわけで，その人たちの経て来た一朝一夕には到達しえない精励の成果であることを忘れてはならないだろう……と何やらありきたりの訓戒めいた口調になってきたが，そもそもこれは誰を相手に述べているのだろう。私自身にか，H. J. 氏にか，それとも未知の誰かになのか判らなくなってきた。今日は，このあたりでノートから退去すべきかもしれない。

16 「孤影」

（5冊目，4 － 5ページ）

都営大江戸線で蔵前に出かけ，小さな会議の後，厩橋から駒形橋へ墨田川沿いを歩いた。ここまで微かに潮の香を含んだ風が上ってくる。途中，割烹店の前に西日を避けられるベンチがあったので，「ブラック・ノート」を開いた。持参したのは5冊目，最初のあたりにモチーフのみを走り書きしたと思えるページが目に入った。以下，全文を記す。

「孤影」

小津安二郎のこんな俳句が目に入りました。

「何処かに夕立ありし冷奴」

たぶん映画の一場面のために備忘録的に詠んだ句でしょうか。カメラでスナップショットを撮り，ストックしておくことに似ています。いや，そういう目的があったわけではなく，ただ楽しみとして作句していただけのことかもしれません。

昔知り合った1人の男の姿と二重写しになりました。と言っても，頻繁に会ったわけではないし，今はどうしているかもわからないのですが。

夕刻の近いころ，還暦を過ぎた年頃の男が1人，小料理屋で冷奴をつまみにして酒を飲んでいる映像が浮かびました。男の背は孤影を曳いています。深酒をする時間ではないし，酒に強いわけでもありません。家族は1人，娘がメキシコにいて，小さな画廊を開いていると聞きましたが，長い年月会っていないようです。30歳半ばで亡くなった妻の連れ子で，血がつながっているわけではないけれど，必死で育て上げた自負だけはあると呟いていたことがあります。過去を語ることは一切やめたとも。話し出すとあまりに長くなり面倒だから。今も昔も売れない大部屋の俳優で，若い頃1つだけ台詞をもらった役があったらしい。パチンコ屋から出てきて，「たまには，いいこともなくちゃなー」と笑顔で呟く。私はその映画を見たわけではなく，男から聞いただけです。知り合ったのは，私が松竹でスチール写真を撮る仕事のとき。寒い日で，熱いウーロン茶の缶を「どうぞ」と一言，不愛想な口調で手渡してくれました。

小津安二郎の句，一見すると質素に思える句ですが，読む者は五感のすべてをさわさわと刺戟されます。意外にも豊かな感覚的な句義をもっている気がします。

年を重ねた男が，夏の午後，ポツンと窓際の席に坐して冷奴を食している。店の窓は開け放され，微風が通り抜けていく。どこか遠くで夕立があると，風の気配でわかるものだ。わずかに湿った匂いを空気が運んできて，肌に感じる。小さく遠雷の轟が聞こえる。その中で，男は静かに1人，奴に切った白い豆腐を味わっている。慌てる気配はない。もはや男には急ぐことなど何もないのだ。やがて黒雲が店の上空に到来し，急峻から流れ落ちるように雨が降り注ぐ。激しい雨音にも男は姿勢を変えず，あたかも影そのものになっているかのようだ。

いま私も部屋の窓を開け，遠くから近づく雨の気配を肌に感じています。沙羅の高枝が揺れ始めました。

〈寸感〉

確定的なことを言えるほどノートを読み進めたわけではないが，笠間保が知人に触れた文章の数少ないものの1つかもしれない。どこで見つけたかのか，珍しい小津安二郎の俳句に，大部屋暮らしだった俳優の姿を重ねている。男には人生の起伏のドラマがありそうだ。

俳優を志したのはなぜか，どのような経緯で妻は若くして亡くなったのか。妻の連れ子の娘との生活は，どのようなものだったのか，その娘がメキシコで画廊を持つに到ったが，なぜ音信不通の状態なのか。いずれも物語にするつもりで書き記したのかもしれない。どちらかといえば，「ブラック・ノート」には奇想めいた話が目につくが（私自身の関心の向け方と話の拾い出し方に起因するのかもしれないが），こうした人生の陰影を覗かせる物語の残映にも心惹かれる。

笠間保がこうした回想を短く記すきっかけになったのが，小津安二郎のまことに簡素な素人芸ともいえる俳句だったことは面白い。何に刺戟されたのかと推察してみると，笠間自身が指摘しているように，この句の図らずも内包する豊かな感応性に違いない。

意識は「何処か」遠くの「夕立」に及ぶ。1人坐す人物は，湿り気を運んできた風のかすかな匂いを肌に感じとる。雷鳴の予感。冷奴豆腐の白とひんやりした柔らかい感触。葱，生姜，茗荷，山椒の葉，鰹節などの薬味を加えれば，さらに味覚や彩りは豊かになる。奴豆腐の謂れを知る人ならば，武家の雑用係の奴さんが，トレードマークとして着物の筒袖に染め抜いていた「白く四角い」紋まで想いおよぶかもしれない。

1 人の孤影を曳くような男の姿。目の前の卓上から湿った空気の運んでくる遠い空の夕立の気配まで，俳句的瞬間の切り取るコズミックな体感の豊かさ思えば，この凝縮された五七五の 12 音の放つイメージの喚起力を無下にするわけにはいかない。

17 「アネモネの花が開く」（仮題）

（5 冊目，6 ページ）

続けて次ページをめくると，最初に詩の一節が引用してある短文がある。長い物語にしようとした形跡は感じられない。比較的珍しく，借り出した本が明記してある。タイトルはないので，仮題をつけて，全文を引く。

「アネモネの花が開く」

装丁に惹かれて借り出した『ペトラルカ恋愛詩選』（岩崎宗治編訳）を眺めていると，訳者の巻末の解説に，リルケの詩が引用してあった。『オルフォイスのソネット』第 2 部・V（高安国世訳）からだ。「次第次第に」の漢字の連なりが気になるが，こんな詩だ。

アネモネの，草地の朝を次第次第に
ひらいてゆく花びらの力よ，
やがて高らかに明け渡った空の多音の
光が花のふところまでふりそそぐ。

花びらは筋肉に渾身の力を籠め，草地の朝に開いていく。空は明け渡り，光が花の奥へと降りそそぐ。花開くことは，「多くの世界の決意であり力」（第 3 連）なのだ。この最初の 1 連を読んで，ふいに甦った光景がある。

30 年ほど前になるが，私は翌年の花カレンダー用の撮影のため，静岡県の藤枝市へ出かけた。行き先は多種類のアネモネを栽培している園芸農家で早朝に着いた。蕾の開く写真を撮りたかったからだ。紫色の花に狙いをつけて接写した。蕾は鶴が首を垂れるような姿でうなだれているが，陽射しが強くなるにつれて，もたげてくる。私はカメラを構え，アネモネの蕾を間近で見ているうちに，ふいに花びらに耳を寄せ，目を閉じた。すると開いていく紫色の花びらに集中した力が，ぎしぎし，がっがっ，ぎゅっぎゅっと軋む音が，だんだん大きく鳴り響き，空へ向かい，宇宙へも轟く叫びとなって立ち上った。なるほど「世界の決意であり力」であるに違いないと今にして思う。しかし，私がその時に感じたのは，世界を鳴り響かせる花の叫喚への怖ろしさだった。私は花びらの開いていくどよめきがいつまでも頭の芯に残り，この我が身に居座った恐怖心に幽閉されて，1 年半ほど仕事ができなかった。

〈寸感〉

笠間保がどのような人物か，少しわかった気がする。仕事ができなかった困難な時期と娘の成長期の葛藤が重なってはいなかっただろうか。そうだとすれば，どのように折り合いをつけて過ごしたのか気になる。いや，笠間に娘などいたか？　先の大部屋俳優の話と私は混同しているようだ。しかし，たまたま思い違いをしてみると，笠間はその男に仮託して自分自身のことを述べたように感じられて

くるから妙だ。

ところで，紫のアネモネの花言葉は，「信じて待つ」とのことだ。またアネモネの花びらに見える部分は，ガク（萼）であるという。両者が類似して区別しにくい場合，「花蓋」と総称する。多彩な賑わいを持つアネモネは，花も葉も枝も毒性があり，切る際に液汁が手などに付着すると，かぶれや水疱疹などの疾患を招くらしい。しかしこれらのことは，笠間保のアネモネ体験と結びつくような比喩的な意味はとりたててない。

18　デイヴィッド・ヒュームの箴言

（5 冊目，6 ページの欄外）

アネモネの話のあるページの欄外に小さな字で箴言風の文が書き付けてある。コメントもなければ，筆者と出典の記載もない。

> 悲嘆と失望が怒りを生じさせ，怒りが羨望を，羨望が悪意を，悪意がさらにまた悲嘆を生じさせ，かくしてこの因果の円は一巡りする。

〈寸感〉

これはどの名言名句事典にも載っている，18 世紀スコットランドの哲学者デイヴィッド・ヒュームの『人性論』の中の言葉だ。誰の訳を使ったのかは不明。『人性論』を借り出した記載がないので，いずれかのアフォリズム集を見たのだろう。

笠間保がどのような心境を託して引用をしたのか，ほぼ察することができる。というよりも，誰でもが経験のある「因果の円」であろう。このやっかいな心の循環運動のゆえ，ヒュームが別の箇所で言うように，「心は一種の劇場」なのだ。しかし，悲嘆と失望が，怒り，羨望，悪意へ向かって動き出すと，奇妙に気分が活気づいてくることもあるのだ。気持ちが昂揚し，冗舌となり，立ち直る兆しのような錯覚さえする。皮肉なことに，こうした心的状況にあったときほど，書くことに向かって衝き動かされる。笠間保が 40 冊にも及ぶブラック・ノートを残した事実も，これと無縁ではないような気がする。

［続く］

執筆者について——
中村邦生（なかむらくにお）　1946 年生まれ。小説家。小社刊行の主な小説に，『転落譚』，『チェーホフの夜』，主な批評に，『未完の小島信夫』（共著），『『罪と罰』をどう読むか』（共著）などがある。